

関税を通して考えた「税」の役割

豊川市立中部中学校3年 田中 伶奈

私はこれまでに、父の仕事の都合でベルギーや南アフリカ共和国に住んだことがある。海外で暮らす中で、日本では当たり前に手に入るものが手に入らず、初めて「関税」という税の存在を実感する機会があった。

ベルギーに住んでいたとき、日本の食材がとても恋しくなった。アジア食品店では、味噌や醤油、お米などを買うことができたが日本で買うよりも品ぞろえは限られていて値段もずっと高かった。それに、インターネットを使って日本から文房具や洋服などを取り寄せようとしたが、送料に加えて関税がかかるため、実際の値段よりもずっと高くなってしまった。「同じ商品なのに、なぜこんなに高くなるの?」と当時は不思議に思っていた。

また、南アフリカから帰国際、家族で気に入ったワインを日本に送りたくて、たくさんのワインを船便で送ったことがあった。数ヶ月後、日本の家に荷物が届いたが、そのときにワイン一本一本に関税がかかり、まとめて大きな金額を支払うことになった。まさか「自分たちの家に送ったもの」に税金がかかるとは思っていなかったので驚いたが、関税というものが、どれだけ国と国との間でしっかりと管理されているのかということが分かった。それにアルコール飲料は特に厳しく関税がかけられており、関税には品目ごとに異なる基準があることを学んだ。

関税とは、外国からの輸入品に対してかけられる税金であり、国内産業を守るための手段でもある。例えば安い海外製品が大量に入ってきたら、日本の企業や農家が作る製品が売れなくなるおそれがある。そうならないように、関税をかけて「価値のバランス」をとることで、国内の産業を守っているのだ。一方で、関税が高すぎると、消費者である私たちが自由に世界中の品物を手に入れにくくなってしまう。特に、海外に住んでいると「どうしても欲しい日本の商品」がある。送料や関税が高いためにあきらめざるを得ないことも少なくなかった。国を守るために制度でありながら、私たち一人ひとりの生活にも直接影響する税金なのだということを実感をもって理解するようになった。

また、関税は国と国との交渉にも関係している。どの国とどのような貿易をするかによって、関税のルールは変わる。こうした制度の裏には、外交や経済政策が深く関わっているのだと思うと、関税は単なるお金の問題ではなく、国の在り方そのものを映しているようにも感じる。これから先、国際交流が広がる中で、関税のあり方も変わっていくかもしれない。輸出入のバランスや公平な貿易の実現には税に対する正しい理解と、それが私たちの暮らしにどのようにかかわっているのかを見つめる視点が欠かせない。関税は、国境を超えるものと思いをつなぐ懸け橋でもある。私はこうした税の役割を正しく理解しながら広い世界と関わっていける人でありたい。